

## 第2章 銃後

東京大空襲①

# 東京が焼け野原になった日

辻野キミさんのお話から

○東京大空襲 約十万人が亡くなった昭和二十年三月十日の空襲。空襲があったのは、深夜〇時七分。冬の北西の季節風が強かったため、火災が広がり、被害が大きくなった。

昭和二十年（一九四五年）三月十日。東京大空襲と呼ばれる大規模な空襲がありました。私はそのころ、東京にある医学歯学専門学校（現在の大学）に通っていたので、東京都の目黒という場所に住んでいました。

当時の東京は、現在のようないコンクリートや鉄骨でできた高層ビルが立ち並ぶ町並みではなく、木でできた家がひしめき合う町でした。そのため、道路が狭く、家と家とのすき間がほとんどない、密集した地域だったのです。

東京大空襲では大量の焼夷弾が落ちてきました。焼夷弾とは、火事を起こさせるための爆弾です。それが、まるで冬に降ってくるあられのように落ちてきました。木造の家々はあつという間に燃え広がり、辺り一面が火の海になったのでした。燃え広がる火の音は、言葉では説明できないほどすごい音をしていました。

人々は火に飲みこまれないように逃げましたが、燃え移るスピードが速く、たくさんの方が火に飲まれて焼け死にました。水の中なら大丈夫と思つて川に飛び込んだ人たちもいましたが、火というのは川面を伝わって燃え広がっていくので、結局は呼吸をするために水面に顔を出したときに、顔をやけどし、死んでいくのがほとんどでした。

焼夷弾の攻撃に耐え抜いたわずかな建物には、今度は爆弾が落ちてきました。爆弾の威力で建物に穴が開き、そこにいた人間はみんな吹き飛ばされ、道路にばらばらと落ちていきました。空襲後の道路にはたくさんのお体がありました。

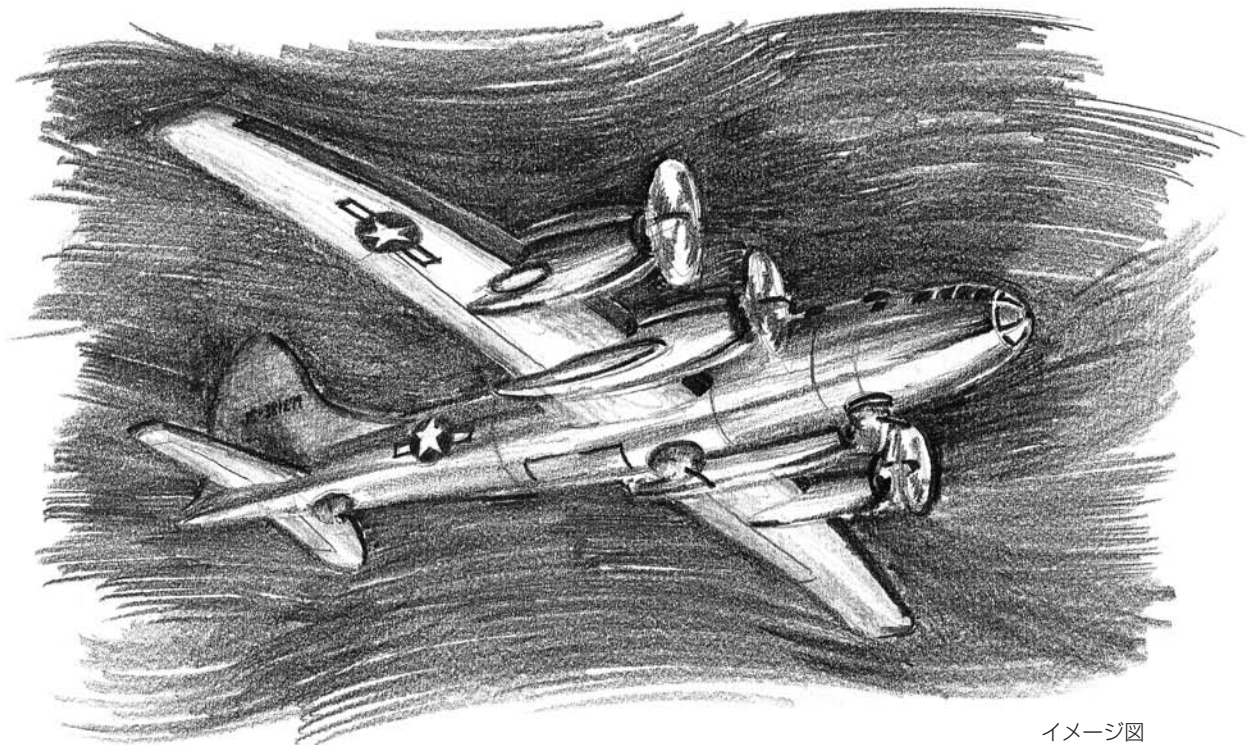
○防空壕 空襲の被害を避けるための穴ぐら、地下室。

○B 29 B 29は翼長四十三メートル、全長三十メートルもある体育館なみの大きさで、多数の爆弾を積み込んで長距離飛行ができる。

運良く生き延びた人たちは、その遺体を片付けるのです。私もその役割をしたことがあります。今考えれば恐ろしい体験ですが、当時はそんな感覚がまひしていて、なんとも思わなくなっていました。

東京大空襲では約十万人の人が命を落としましたが、空襲に備えて準備をしていなかったわけではありません。近所の人たちで協力して防空壕を作ったり、灯火管制で夜に明かりをつけないようにしたり、いつでも逃げられるように普段着のまま寝たりしていました。しかし、空襲警報が鳴ったときには、敵機のB 29が上空に飛んで来ていた状態だったので、防空壕に入る時間がなく、大きな被害になったのです。

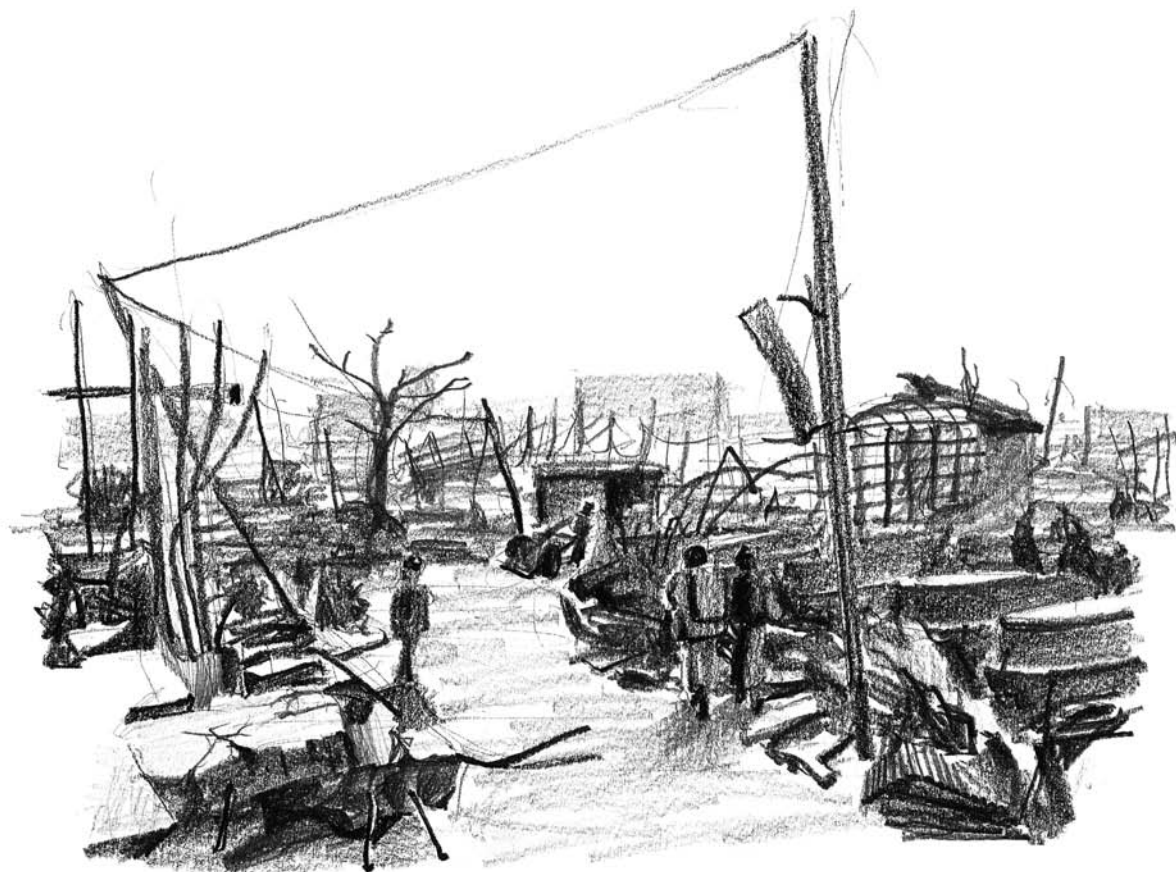
空襲の被害から守るために学童疎開ということもしていました。学童疎開とは、小学生までの子どもたちが親元を離



イメージ図

れて、より安全ななかに引越すことです。親せきなどがいる子どもは、そちらにお世話になるのですが、いない子は学校の先生が見知らぬ土地のお寺や学校に連れて行き、そこに泊まりながら暮らしました。夜になると家族に会えないさびしさから「お父さん、お母さん」と泣いた子どもがたくさんいました。東京に残ったお父さん、お母さんの中には爆弾で亡くなった方もいました。そのため、戦争が終わって、子どもたちが帰ってきてても、両親に会えなかったり、自分の家がなかったりする子もいました。

昭和二十年八月十五日。日本は終戦を迎えました。戦争が終わって感じたことは、うれしいとか、悲しいではなく、平和のありがた



イメージ図

敗戦直後の東京

○配給 米やみそ、さとうなどの食べ物を平等にわりあてて配る制度。  
米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てる配給制度。砂糖・マッチの切符制の導入が最初。米については、昭和十六年（一九四一年）に始まった。

○結核 結核菌が引き起こす伝染病。特に肺にかかることが多く、かつては命を落とすことが多い病気であった。

さでした。特に、夜に照明をつけて生活できることで、心が明るくなりました。電気のついた夜道を歩くことができたとき、私は平和のよさを強く実感しました。

しかし、戦争が終わってもすぐに生活が良くなるわけではありません。食べ物が不足していたのです。今の時代ならば、食べ物が豊富にあるので、おいしいものや好きなものを食べ、好き嫌いの多い子もいますが、当時は食べ物自体がないので、そんなことを言っていられなかったのです。食べることができたのはおかげで、少しのお米に大根やいもを刻んで入れたものを食べていました。食べ物の配給はありましたが、お腹がいっぱいになるほどの量はなかったのです。お腹を空かしている子どもがたくさんいました。栄養失調から病気にかかる子どももたくさんいて、伝染病がうつりやすい状況でもありました。私自身も栄養不足から体調を崩し、結核という病気になり、病気を治すために大学を休学して札幌に帰って来たのです。

戦争とは多くの人たちが死んでしまうことなのです。そして多くの人たちが悲しい思いをすることなのです。人間にとってつらいことばかりなのに、戦争をしようと考え、判断しているのはわたしたち人間なのです。二度と戦争をしないために、戦争が良いことなのか、悪いことなのか、一人一人がきちんと判断して、みんなの力で戦争を防ぐようにしてほしいと思います。そして、家族が一緒に笑顔で安心して食事をとれるような平和な世の中を大切にしてほしいと思います。

## DATA

平成20年度北区平和事業  
聴き取り

- ・平成20年8月7日
- ・白楊小三二児童会館



辻野キミ(つじの・きみ)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市北区在住